

総括研究報告書

1. 研究開発課題名： 服薬アドヒアランス向上に関する研究
2. 研究開発代表者： 白阪 琢磨（独立行政法人国立病院機構大阪医療センター）
3. 研究開発の成果

HIV 感染症は、抗 HIV 薬の多剤併用療法により慢性疾患と捉えられるまでになったが、抗 HIV 薬の副作用や薬剤耐性変異株の出現など克服すべき課題があり、服薬は長期に亘り、医療現場では服薬疲れなども見受けられる。本研究の目的は、服薬アドヒアランス向上・維持のため、その阻害因子、増強因子を明らかにし、支援方法の開発、特に効果的な介入のためのツールの開発を行い、それらの効果の評価を行うことである。本研究目的達成のため、次の4研究を実施した。

A 一般集団と HIV 感染症患者における服薬行動に関する意識調査研究

有効な服薬支援策を講じるためには、HIV 感染症患者（以下、HIV 患者）の服薬行動にどのような特徴があるかを探索する必要がある。一般集団と比較した HIV 患者の特徴を明らかにするため、HIV 感染症以外の疾患（高血圧、乳癌、骨粗鬆症）を治療中の患者も対象とした意識調査を行い、服薬行動に影響している因子をより多角的に分析した。

「属性、病歴」「生活状況、周囲からのサポート状況」「処方状況」「服薬状況」「疾患や薬剤に対する意識」に関するインターネット調査を行い、内服治療中の高血圧患者、乳癌患者、骨粗鬆症患者、HIV 患者、合計 640 人から回答を得た。HIV 患者と HIV 感染症以外の疾患患者の服薬アドヒアランスを比較した報告はこれまでになく、本調査では、両者の服薬アドヒアランスに有意差を認めないこと、および両者に共通する服薬アドヒアランス関連因子を示した。しかし、HIV 患者数が 49 人と少なく、また、いずれも服薬支援サービスを受けている HIV 患者であったことから、対象者が偏っていた可能性があり、さらに対象者数を増やし検討を行う必要がある。

B HIV 感染者の受診行動に影響を与える要素に関する研究

大阪医療センターにおける受診中断者の背景について調査を実施。

受診中断者に共通した背景として、CD4 値が高値、抗 HIV 療法が未治療、過去に受診中断歴がある、精神科受診歴のない患者が多く、また、有職者、パートナーがいない、他者への病名告知の有無では告知している者が多い傾向にあった。今回、初診から 1 年以内に受診中断に至るケースが 31%を占めており、これは何らかの原因があると推定される。中断者にみられる傾向を元に、今後は、受診中断にかかわる因子を明らかにすることと、定期受診を継続できている群に対し、受診継続を強化している因子を明らかにする。

C HIV 患者の受診中断に関する研究

受診・服薬中断によりエイズを発症し、場合によっては死に至る HIV 患者が今もなお存在する。受診・服薬中断を防ぎ臨床指標を改善するための支援方法を検討するためには、HIV 感染者の受診行動を理解することが必要である。

1: 受診行動の実態調査 期間中の未受診者のうち、確認が取れたものは 91 名であった。今年度、中断者・転帰不明者について分類と分析を行う。また、全死亡例より、受診中断から死に至った例の解析を行う。

2: 服薬行動の実態調査 定期通院者のうち、抗 HIV 薬内服継続中の患者は 970 名（治療成功者 896 名、治療失敗者 74 名）、未治療 50 名であった。症例別レジメンについて今年度、分析を行う。さらに受診中断につながる各種依存症や人格・認知など精神心理面に関連する要因の解析、就労・就学、家族関係など、社会的要因に関連する要因の解析を行う。

D 介入ツール開発

スマートホンを使用した HIV 患者の服薬を支援するツールとして、オペレーティングシステムとして Android が搭載されているスマートホンに対応したアプリケーションを開発した。

Android の公開技術情報および携帯電話事業者が提供している固有の技術情報を調査し、前研究で構築した「忘れちゃだ・メール」が提供しているお薬時間お知らせサービスの機能を基礎として、スマートホン上で実現可能な拡張機能（服薬できない時の再案内、お薬の残数管理、次回通院案内）などの服薬支援機能を充実させ、また、アンケート実施機能なども実装した。